

高松宮旧蔵『寂蓮集』をめぐって

— 雑纂本『寂蓮集』の成り立ちと性格 —

中村 文

一 はじめに

平安末期から鎌倉初期にかけて活動した歌僧寂蓮は、俊成の甥にして養子となり、さらに家隆の義父となった点でも、また様々な階層の人々と歌筵を囲んだ詠歌実績によっても注意される歌人である。その家集については、早く久曾神昇が『顕昭・寂蓮』（以下、「久曾神著書」と略称）で諸伝本を紹介し、その後、半田公平が『寂蓮法師全歌集とその研究』（以下、「半田著書」と略称）で多くの伝本を調査報告した⁴²。寂蓮の家集は、①一〇九首から成る部類本（いわゆる寿永百首家集本）と、②寂蓮没後に他撰され二六〇余首を収める雑纂本とを基幹とするが、現存する『寂蓮集』は①ないしは②が単独で伝来するものだけではなく、これに③六百番歌合および千五百番歌合の二種の百首と三体和歌、④撰集に入るが家集に見えない歌の抄出、を加えた四要素が様々に結びつき、多様な形態を示している。

例えば、『私家集大成』中世Ⅰに入る寂蓮集Ⅱの底本となった国立歴史民俗博物館蔵高松宮旧蔵本『寂蓮集』は、雑纂本に六百番歌合

と千五百番歌合の各百首、それに「入撰集不入家集歌」と三体和歌詠を併せた全五四七首からなっている。また、『新編国歌大観』第四巻に入る寂蓮集の底本である宮内庁書陵部本は部類本と雑纂本を併せた三八六首からなる。その他、①②④を併せた『寂蓮集』も存在する。

これらの諸形態を半田は五系統に整理している。現存伝本の形態の違いによる分類は半田によって明らかにされたと言えるが、『寂蓮集』の根幹を成す①②の家集については、その成り立ちや性格が、まだ十分に検討し尽くされたとは言えない。①の部類本は自撰である上に、寿永百首家集群に関する研究も進展して、その性格はまだしも明確だが、②の雑纂本（特に②のみを内容とする伝本群）は、重出歌を多く含むなど未整理な印象が強いためか、注意を払われることが少なく、集としての性格も明らかにされたとは言いがたい。

ところで、この雑纂本のみを構成要素とする『寂蓮集』の一本に、国立歴史民俗博物館に蔵される高松宮旧蔵本がある。すでに半田著書に「高松宮家蔵A本」（本稿でも、この分類に従う。以下、「高松宮A本」「A本」と略称）の名で紹介されるが、現存する『寂蓮集』

の諸本が、多く江戸中期以降の写本である中で、該本は江戸初期写と写しが古く、また後述するように伝来の素姓も確かな伝本である。

ところで、雑纂本のみから成る『寂蓮集』の伝本に冷泉家蔵本が存することは久曾神著書が指摘し、また半田著書も久曾神著書に拠り「高松宮家蔵A本」と同じ分類項目の中に「冷泉家蔵本」の存在を記している。高松宮A本はその形態や伝来から見て、この冷泉家本『寂蓮集』と深く関連する伝本と推測される。冷泉家本は雑纂本『寂蓮集』の原態を解き明かす鍵となる伝本と想定されるが、存在のみは知られるものの、『冷泉家時雨亭叢書』等にも影印が入らない。冷泉家本の実体が確認しえない現時点において、高松宮A本は雑纂本『寂蓮集』の性格を考察する際に、もったも有力な材料となると言えよう。

以下、本稿ではこの高松宮A本の本文および構成を検討しながら、雑纂本『寂蓮集』の集としての傾向を探ることとしたい。高松宮A本の特徴を取り上げ、さきに触れた『私家集大成』所収「寂蓮II」の底本となった高松宮田蔵本（以下、「高松宮B本」「B本」と略称）、および『新編国歌大観』第四卷所収「寂蓮集」の底本となった宮内庁書陵部蔵本（以下、「書陵部本」「書本」と略称）の雑纂本部分との比較を通して、雑纂本としての特性を考察し、また雑纂本が他の要素と結びつきながら現在見る『寂蓮集』の諸形態へと成長する間に、どのような変容を遂げたのかをたどってみたい。

二 高松宮家旧蔵『寂蓮集』A本の概略

まず、検討対象とする高松宮A本の書誌ほかの概略を記しよう。すでに半田著書にも紹介があり重複する点が多いが、稿者が調査したところを記しておく。

高松宮A本は現在、国立歴史民俗博物館に「高松宮家伝来禁裏本」のコレクション名で蔵されている（資料番号H—六〇〇—五五〇。元函架…る函二七三）。

袋綴一冊。江戸前期写。縦二七・六×二〇・四cm。縹色の紙表紙で上藍下紫の内曇あり。表紙左肩に抹茶色の題簽（一五・一×一三・六cm）を貼り、「寂蓮集」と墨書する。料紙はごく薄手の楮紙。遊紙前ナシ、後一丁。墨付二十三丁。一面十四行書き。和歌一首一行書き。字高約二五・〇cm。詞書は三字下げ。本文は二十一丁ウラで終わり、二十二丁オモテ・ウラに左のような奥書がある（改行は原態のまま。割注は〈 〉で示し、その改行はスラッシュで示した。和暦の右傍に西暦を付した。以下、奥書の処理は同じ）。

和歌二百九十五首

本云 春誓法橋 窓信僧都

供送之 以之書写也

(二五三) 建長五年十一月七日書写校合了 「22才

(二八) 弘安四年〈辛巳〉夏五月之比以大原野

禪尼本教人〈善峯寺／信宗闍梨〉書写了

同八月校合了 権律師玄覺 「22ウ

この奥書は、高松宮B本でも268番歌の後、すなわち雑纂本の末尾に記されているが、雑纂本のみを要素とする高松宮A本に見え

ることから、すでに半田著書に指摘のある通り、雑纂本それ自体
に關連した奥書であると考えられる。高松宮B本の奥書は、

本云
春誓法橋本

定信僧都借進之以之書写之

本云
建長五年十一月七日書写校合歟

弘安四年夏五月之比次大原野禪尼本教

人（善峯寺／信宗日宗）書写之同八月校合之

權律師玄覚

となつてゐる。B本の「春誓法橋本」、「校合歟」、「信宗日宗」（傍
点稿者）等の箇所は文意不通であり、A本の本文に就いて初めて
その内容が理解できる。A本二十二丁オモテでは行取りに沿つて
上から下へ読み進めるといふよりも、むしろ「春誓法橋／供送之」
「窓信僧都／以之書写也」の二行ずつのブロックが上下二段に重
ねられているような書き方がなされておられ、春誓法橋が手許に
あつた『寂蓮集』を提供し、それを窓信僧都が書写したという伝
写の経緯がより明確に読み取れる。春誓はすでに指摘があること
く、寂蓮の遺志を継いで新撰深窓集という私撰集の編纂を成功し
た人物で、この人物の許に雑纂本『寂蓮集』があつたことは十分
な必然性がある。すなわち、A本の奥書は雑纂本『寂蓮集』の生
成と伝来の経緯を正確に伝えていると推測されるのである。後半
部分も、弘安四年夏に大原野禪尼本を善峯寺信宗闍梨に書写させ
たことがよく理解できる。奥書から見ると、A本は近世初期の
写本ではあるものの、転写による本文の改変の程度は小さく、雑
纂本が生成した際の原態を比較的よく保持していると言えよう。

また、A本の二十二丁ウラ左下隅には「幸仁」印、後表紙見返

し右下隅には「明曆」印が捺されている。「明曆」印は第百十一
代天皇であつた後西天皇所用の蔵書印、「幸仁」印は後西天皇の第
二皇子で有栖川宮家第三代当主となつた幸仁親王の所用印である。
後西天皇は後水尾天皇第八皇子として寛永十四年（一六三七）生
承応三年（一六五四）に踐祚し、寛文三年（一六六三）、靈元天
皇に讓位するまで十年間帝位にあり、貞享二年（一六八五）に没
した。幸仁親王は明曆二年（一六五六）生で、元禄十二年（一六九
九）没した。高松宮A本は後西天皇から幸仁親王に讓られ、有栖川家
に伝来して、高松宮家の蔵本となつたものと推定される。しかし、
この二印の示す意味は伝来の由緒の確かさを証すに留まらない。
後西天皇は、焼失した禁裡文庫の回復と充実のために、収書や書
写に尽力したことで近時注目を集めている天皇であり、伝本を作
る際には書写の親本を、冷泉家などのしかるべき善本を有する公
家から徴したことが、酒井茂幸らの研究により明らかになつてき
ている。高松宮A本もそうした善本を親本とする伝本である可能
性があるろう。

本稿でこの高松宮A本と比較検討する三伝本についても簡単に
述べておこう。

高松宮B本はA本と同様に、現在は国立歴史民俗博物館に「高
松宮家伝来禁裏本」として蔵される（資料番号H-1600-
五四九、元函架・る函二七二）。袋綴一冊。江戸中期の写本で、『私
家集大成』中世I所収「寂蓮II」の底本である。

書陵部本は函架番号五〇一・七二五。袋綴一冊。江戸写の御所
本で、『新編国歌大観』第四卷所収「寂蓮法師集」の底本である。

御所本とは「後水尾・後西・靈元など数代にわたり書写収集した

旧禁裏御文庫本」の称であるから、右に挙げた高松宮A本・B本・書陵部本の三伝本は、伝来から見て相互にきわめて近い関係にあると言える。

さらに、高松宮A本と同系の、雑纂本からのみ成る『寂蓮集』の一伝本として、肥前嶋原松平文庫蔵本をも比較の対象としたい。半田著書では「島原公民館松平文庫蔵本」の名で挙がる伝本で、現在は島原市立島原図書館内の肥前嶋原松平文庫に蔵される（以下、「松平本」と略称）。函架番号一三六・一〇、袋綴一冊、寛文・元禄頃の写本で、左のような奥書を有する。

和歌二百九十五首

写本云

本云

春誓法橋本 窓信僧都

借送之 以之書写也

「31才

弘安四年（辛巳）夏^五月之比以大原野

禪尼本教人（善峯寺／信宗圓景）書写了

同八月校合了權律師玄覺

「31ウ

松平本がA本と極めて近い本文を有することについては半田著書にも指摘がある。奥書が先に見た高松宮A本と極めて近く、A本の系統の忠実な写しであることが看取されるが、なお、「善峯寺信宗圓景」の箇所や微妙な字配りなどに相違する点が認められる。重ねて記される「写本云」の字句も、A本の段階から転写を重ねた伝本であることを推測させよう。

さて、以下では高松宮A本と右の三伝本について、雑纂本の部分に限定して比較対照していく。歌番号は『私家集大成』所収「寂蓮II」、すなわち高松宮B本を基準とするが、若干の問題が残る。

高松宮A本と松平本は雑纂本二九五首のみからなるが、高松宮B本と書陵部本では雑纂本箇所は伝本の一部分であり、特に、部類本の後に雑纂本が付いた形態の書陵部本では、他の三本と歌番号が異なるからである。本稿では、書陵部本の歌番号は『新編国歌大観』第四卷所収「寂蓮法師集」に従って示す。すなわち、書陵部本では10番〜386番が比較検討の対象となる。また、高松宮A本・松平本・書陵部本の三本は、高松宮B本に入らない歌を有している。これらの歌についても高松宮B本を基準として「○番の次」という形で示し、高松宮B本の有さない歌が他本で連続してあらわれる場合には「○番の次①②③…」と番号を振って示すこととする。その他の和歌を引用する場合には、本文・歌番号ともに『新編国歌大観』に拠る。

三 二つの高松宮旧蔵本

まず、高松宮A・B両本を比較することから始めたい。高松宮A本は、半田著書が「重出歌が多く、整備された本文とは言い難い」と指摘する。確かに後に検証するように、A本は重出状況から見ると未整理な印象が拭いがたいが、本文自体はむしろB本に不審な箇所が多く、これをA本で訂せる場合が少なくない。参考のために書陵部本の本文と併せて掲げてみよう。例えば、70番詞書は次のようになっている、

(ア) A本 野草秋近 民部卿 當、

B本 野草秋

書本182 野草秋近 民部卿會當々

B本の形では、どのような趣旨を詠むことが求められる設題であ

るかが理解しにくい。⁴⁶ また、詠出の場についてもA本・書本に記された会記によって初めてその手がかりを得ることができる。38番詞書でも、A本・書陵部本が「鳥羽殿御遊」の会記の下に「建仁元年四月」と開催時を注するのに対して、B本では「鳥羽殿御遊和哥船にて」とあるのみで、開催時を示していない。⁴⁷

年号や人名なども、左に示したごとく、A本が妥当で、B本が誤っている場合がまま見られる。

81詞書 185番左注 213詞書 215詞書

(イ) A本 文治六年 句題百首 左大将實定 伊綱

B本 文保六年 同題百首 左大将実道 是繩

書本 193文保六年 300句題百首 330左大将實定 332伊綱

和歌の本文においても、A本とB本が対立を示すことがある。

例えば(傍線稿者)、

(ウ) A本 さひしさにうき世をかへてしのはすはひとり聞へき松

の風かは (167)

B本 恋しさにうき世をかへてしのはすはひとりきくへき松

の風かは (167)

書本 さひしさに浮世をかへて忍すはひとりきくへき松の風

かは (282)

の初句は、出家者の覚悟を歌った一首の内容から見て、「さびしさに」とあるのが妥当で、B本の形では意が取りにくい。この歌を収めた千載集(雑中1138)でも初句は「さびしさに」である。

また、「ほたる」題で詠まれた、

(エ) A本 夏虫のよそにもえ行思ひまてうき身にやとすそてのつ

ゆかな (39)

B本 夏虫のよそになり行おもひまてうき身にやとす袖の露哉 (39)

書本 夏虫のよそになりゆくおもひまてうき身にやとす袖の露哉 (150)

においては、螢の光を「思ひ」の「火」と見て動詞「燃える(恋に身を焦がす)」と取り合わせる修辭が伝統的であるから、二句はA本のように「よそにもえ行」とあるのが妥当であろう。

「五月」題で詠まれた、

(オ) A本 ふりそめてたえく見えしにはたつみひとつつ、く

五月雨の比 (260)

B本 ふり初てたえく見えし庭たつみひとつつ、く五月

雨の空 (260)

書本 ふりそめてたえく見えし庭たつみひとつつ、く五月

月雨の空 (378)

は、降り始めた頃には水たまりはあちこちに散在していたが、雨の続く五月雨の時期には水たまりが一つに連続して見える、という内容である。結句は「五月雨の比」「五月雨の空」のいずれでも通り、B本・書本の「五月雨の空」の方が、前後に即きすぎず新鮮な印象を与えるとも言えるが、和歌的文脈に沿った措辭を考れば、A本の「五月雨の比」が穏当であろう。

以上のように、和歌本文の点から見ても、A本はB本よりも妥当な本文を有すると判断できる。また、三伝本の比較検討を通して、(ア)(イ)に掲げた固有名詞等の面ではA本とほぼ同様の本文を示して誤りのなかった書陵部本が、(ウ)(エ)(オ)で検討したごとく、和歌本文においてはむしろB本と同じ形を示す傾向のあることも了解

される。雑纂本は生成された当初においては、A本のように「雑纂本」単独で存在していたはずで、部類本や百首歌などの他の要素が付随したB本や書陵部本は、A本よりは後に発生した形態と言える。さらに諸本を詳細に検討する必要のある問題ではあるが、それぞれ初発と後発の形態を持つ伝本が本文を異にする場合、他の要素を統合して形態が変容するに従い、本文も次第に改変していったと考えるのが自然であろう。すなわち、A本の本文は、単に複合的な成り立ちを持つ諸系統の本文を訂する材料となるばかりでなく、雑纂本（寂蓮集）が成立したときの原初的形態を示唆してもいよう。右の(ウ)(エ)(オ)のような、単なる誤写によって生じたとは言い難い和歌本文の異同が認められる箇所では、諸本の性格を踏まえた上で、どの本文に就くかを慎重に判断する必要があるだろう。

四 所収歌に見る雑纂本『寂蓮集』の変容

次に、A・B両本の所収歌の相違を検証してみよう。両本を比較すると、A本には存在するがB本では同じ位置に当該歌が存在しない場合が二十七例ある。その一覧を付表のA・イの欄に示した。以下では各歌を表の左端に付したa～aの記号によって指し示す。これらの歌は付表オ欄に示した如く、a b d f i sを除く二十二例が、A本内の別の箇所に重載されている。また、イ欄に濃い網掛けを施したように、fとi、nとtが重複するが、n tの「月きよみ」歌はオ欄に示したように94番にも入る。三箇所に重載される歌はこの一例のみだが、半田著書の「重出歌が多く、整備された本文とは言い難い」との指摘はこの表からも肯われる。

〈付 表〉

	ア 歌の位置	イ 初句	ウ 書本	エ 注		オ A本内 重複状況	カ 重複分の有無	
				A本	松平本		B本	書本
a	15の次	なかめつる	125	ナシ	ナシ	×	—	—
b	31の次	あぎといへと	142	ナシ	ナシ	×	—	—
c	41の次	雲きゆる	153	ナシ	ナシ	258	258	376
d	153の次	うしのこに	266	ナシ	ナシ	×	—	—
e	156の次	さとはあれぬ	×	両書	両書	76	76	188
f	160の次	こはき咲	274	ナシ	ナシ	× (189の次)	× (299)	305
g	164の次	降雪に	279	ナシ	ナシ	4	4	113
h	167の次	東路を	×	在前	在前	115	115	227
i	189の次	こはき咲	305	ナシ	ナシ	× (160の次)	×	274
j	192の次①	色はみな	×	ナシ	有端	1	1	110
k	192の次②	尋入	×	ナシ	有端	32	32	143
l	192の次③	あくかれし	×	ナシ	有端	33	33	144
m	195の次①	をしか鳴	×	ナシ	有端	3	3	112
n	195の次②	月きよみ	×	ナシ	同	94	94	206
o	197の次	須まの浦の	314	ナシ	有前	36	36	147
p	202の次	独ねの	×	有端	有端	90	90	202
q	209の次	しかの浦	×	在前	有前	120	120	232
r	237の次	いつもかは	×	有端	(合点アリ)	203	203	320
s	245の次①	うきみいま	×	ナシ	ナシ	×	—	—
t	245の次②	月きよみ	×	有端	有端	94	94	206
u	245の次③	故郷に	×	ナシ	ナシ	95	95	207
v	245の次④	うの花の	×	有端	有端	18	18	128
w	245の次⑤	よをのこす	×	有端	有端	19	19	129
x	249の次①	ほのかにも	×	在前	有前	20	20	130
y	249の次②	秋の色も	×	在前	同	21	21	131
z	252の次①	秋かせも	370	ナシ	ナシ	22	22	132
a	252の次②	今はたゝ	×	有端	有端	23	23	133

まず、A本内部に重載されていない歌について簡単に述べておこう。aは、

(カ) 左大臣殿御会四季恋

なかめつるけふはむかしに成ぬとも軒端の梅は我を忘るなと見えるもので、有名な式子内親王の詠である。何らかの理由で竄入したものと思われるが、『寂蓮集』でこの後に入る16番歌（掲出はA本による、他本にもあり）、

はるさめはふるともなくてあをやきの糸につらぬくたまそ数そふ

は三百六十番歌合で「ながめつる」歌（同歌合60）と隣り合わせの位置（同61）に、「前斎院」の作者名で入っている。この両首について立ち入る用意は現在のところないが、「はるさめは」歌も含めてさらに慎重な検討が必要であろう。

bとsはそれぞれ、

(キ) あきといへとふかきうらみは衣うつ (b)

うきみいまやそうち人のかすなれは (s)

と上句のみが記される。dの、

(ク) うしのこにふまるな庭のかたつふりつのありとても身をなたのみそ

は、建久二年（一一九一）冬に成立した十題百首の「獣」部の詠である。

f・iは同一歌でA本内部では重出するのだが、B本・書本ではそのどちらの位置にも当該歌を置いていない。上の四例とやや性格を異にするが、所収歌の点でB本・書本と対立する例としてここに掲げる。歌は、

(ケ) 左大臣家百首歌合秋雨

こはき咲かた山かけに日くらしの鳴すさみたるむらさめの空⁸⁸

(f)

の詞書に明らかなごとく、六百番歌合に提出された詠である。

右の六例以外の、A本内部に重載歌が認められる場合において、その歌がB本・書陵部本でA本の重載位置に存在するかどうかを示したのがカ欄である。A本にあってB本の同じ位置に存在しない歌は、A本内部で当該歌が重出しているかぎり、すべてB本・書陵部本の同じ位置に収載されていることが明らかである。つまり、B本・書陵部本は、未整理の雑纂状態にあったA本から、重出歌を除棄し、整備した結果生じた形態と位置づけることができるよう。

例外は先に挙げた(ク)で、重出するf・iのいずれもが除棄されていて、右のルールからは外れる。ただし、B本はこの「小萩さく」歌を雑纂本ではなく、これに後接して置かれる「詠百首和詞」、すなわち六百番歌合に際して詠んだ百首歌の一首としては収めているのである（299番歌）。あるいは、f・iの「こはき咲」歌は、雑纂本『寂蓮集』と二種の百首歌が併せられた際に、重複するとして除棄された可能性も考えられるのではあるまいか。

さて、ウ欄には、A本にあってB本の同位置には存在しない歌の、書陵部本における有無を示した。算用数字は書陵部本雑纂本部分においてA本と同じ位置にその歌が見える場合の歌番号を示し、×印は当該歌が同位置に見えないことを示す。前節において、書陵部本の本文がA本とB本の間接的性格を示すことを検証したが、所収歌から見た場合にも書陵部本が同様の位置に立つことが

重ねて確認できる。

ところで、このウ欄に関連して興味深いのは、A本・松平本で和歌の肩に付された重出を示す記号の存在である。例えば、
 (コ) 東路をこえくる春の跡なれや今朝あふさかの雪のむらきえ
在簡

(h)

のように記されるもので、エ欄にその一覧を掲げた。肩注がある場合には様々なバリエーションを持つ字句をそのまま記し、肩注がない場合には「ナシ」とした。この肩注と書陵部本における歌の有無を比較してみると、A本・松平本で重出を示す肩注のある歌が、書陵部本では多く除棄されていることが分かる。特に、松平本ではこの一致率が高く、例外はosuの三例のみである。

このことは、高松宮A本や松平本のような雑纂的な原初形態の伝本に、所収歌の重出に気づいた何人かが肩注を付し、これに基づいて歌が除棄されて書陵部本のような形態が生まれた、『寂蓮集』の漸進的な諸段階を示唆している。こうして成立した書陵部本のような形態を基に、さらに重出歌を精査して除棄し、また他人詠であるaや(キ)に示した上句のみのb等をも削除して、いっそう整備の進んだ高松宮B本のような形態が生み出されていったものと推察される。

五 〈整備〉作業がもたらしたものの

それでは、数次にわたる整備を経た高松宮B本のような段階が、我々のもつとも拠るべき本文を示しているのだろうか。以下では、重出歌の除棄という〈整備〉によって、本文がどのように変容したかを検証していきたい。

まず、oの例を取り上げる。oはA本においては次のように記されている（立論の都合上、当該歌以外の部分も記す。以下同じ）。

(サ) 百首哥めしけるに春哥中に
在簡

しかの浦やけふたち帰るはる風にこほらぬ波もとをさかる也

(209の次)

志賀の浦に釣するあまの袖さえてかへる波ちに氷しにけり

(210)

詞書の「百首哥めしけるに」は、言うまでもなく当該歌が正治二年初度百首の詠であることを示している。前者の「しかの浦や」歌はB本・書陵部本では削除されている。重出する120番歌は、A本では「御所先度百首」の詞書で119番〜136番まで連続する正治二年初度百首の歌群の二首目に配されているが、B本・書陵部本では同じ歌群中ながら「百首哥めしける中に」の詞書を付して置かれている。すなわち、B本・書陵部本の〈整備〉作業は、重出する歌の片方を除棄すると同時に、除棄した和歌についていた詠出機会等に関する詞書の情報を、残す側の和歌に追加するという形式で行われていたことが看取される。

ところで、重出歌が除かれた(サ)の箇所は、B本・書陵部本では次のようになっていいる。ここでは書陵部本に拠って掲げよう。

(シ) 百首哥めしけるに春哥中に

志賀の浦に釣するあまの袖さえてかへる波ちに氷しにけり

(書陵部本327)

本来は「しかの浦や」歌に付されていた詞書が、当該歌が削除されることにより、後接するB本210（書本327）番「志賀の浦に」歌にそのまま付けられてしまった消息が見て取れる。〈整備〉作業

においては、詠出事情を記した詞書は除棄歌の後続歌に別の詞書が付されていない限り、そのまま残しておく方針であったのだろう。(シ)では本来組み合わせられていなかった和歌と詞書の季節が合致しないが、B本ではこれを不審としたのか「百首哥めしけるに冬の哥中に」と詞書が改変されており、B本が書陵部本よりも整備の進んだ段階にあることがこのことから確認できる。なお、B本210(書本327)番「志賀の浦に」歌は、現在残される正治初度百首には見出せない。あるいは、正治初度百首に際して詠んだものの提出しなかった作とも考えられるが、詠出機会は未詳とする他なく、B本210・書本327番歌には実際とは異なる詠出機が付けられている可能性も考えられる。

雑纂本『寂蓮集』の冒頭が、A本・B本・書陵部本でそれぞれ異なっているのも、右に見た〈整備〉作業のルールがもたらした結果であろう。A本の冒頭部1〜5番歌は、

(ス) 五首和歌

春

色はみなゆきのあしたの梅か枝にはるのものとて鶯のなく

夏

いかにかくみるもきくもと卯の花にほと、きすなく玉川の里

秋

をしかなくよそのねさめをおもひわひなむれは又在明の月

冬

降雪にのきはかたしくみやま木のおくる梢にあらし吹也

恋

いまはわれうきをかきりとなかめても心のほかはなれし面影

となっているが、書陵部本では「春」の下に「左大臣家会」(110)、「秋」の下に「左大臣会」(112)と記され、B本では「春」の下に「左大臣家会合会イ」と記されている。詞書に追記のある1:3番歌は、付表jmに見えるごとく、A本では192の次と195の次に重出し、それぞれ「左大臣家会春哥」「左大臣家会秋哥」の詞書が付けられている。書陵部本の詞書はこの重出歌を削除する際にjmの箇所から転記したものであろう。¹¹⁾この例では書陵部本の方がB本よりも後に出現した形態のように見えるが、冒頭の「五首和歌」の記述により五首の歌群であることが明らかなので、B本は第一首目にのみ会記を付したとも考えられる。

以上のような作業手順は、本文に思わぬ改変を加えることになった。付表eの例を取り上げながら、その問題を検証してみよう。この歌はA本では、

(セ) 鳥羽殿にて五月十五日

暁聞郭公

ほと、きす有明の月の入かたに山のは出るよはのひと声 (74)

松風涼

さをしかやなを秋までとしのふらんゆふへはいまも松に吹か (75)

せ

遇不逢恋

里はあれぬむなしきとこのあたりまで身はならはしの秋風そ (76)

吹

已上

の歌群中に見え、76番歌のみが、

(ソ) 影供哥会

遇不逢恋

両書
 さとはあれぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ
 ふく (156の次)

と重載される。(セ)に掲げた歌群は、建仁二年（一一〇二）五月二十六日に後鳥羽院が鳥羽城南寺で催した影供歌合での詠で、同年七月に没したとされる寂蓮の、現在判明する限り最後の作である。¹² 高松宮B本と書陵部本では、この(ソ)を欠くが、両本において(セ)の箇所は左のような形態を示している。いま高松宮B本に拠って掲げるが、書陵部本も集付を除いてほぼ同様の形である。

(タ) 暁聞郭公 鳥羽殿にて五月十五日

続下
 時鳥あり明の月の入かたに山のはいつる夜はの^一こゑ (74)

松風暮涼

棹鹿のなを秋までとしのふらん夕はいまも松にふく風 (75)

遇不逢恋 影供哥合

里は荒ぬむなしき床のあたりまて身はならはしの秋風そ吹 (76)

B本・書陵部本の本文が、高松宮A本のような雑纂状態から重複する(ソ)の「さとはあれぬ」歌を除棄し、その際に付いていた「影供哥合」の会記情報を76番歌に移した結果であることは明らかである。この作業を行った人物は、74番歌の詞書に行事が開催された場所と日時しか記されていないために、異なる情報である「影供歌合」を落とさず付け加えておいたのだろう。しかし、その結果、74・75番歌と76番歌とは別行事における詠であるかのような印象を与えることとなった。

(三二)

問題はこれに留まらない。高松宮B本・書陵部本では「さとはあれぬ」歌を削除した後の箇所は、次のようになっていた。これも高松宮B本に拠って掲げる。

(チ) 影供哥合緑歌なる哥めしける時旅の哥

むさし野、露をは袖に分わひぬ草の茂みに秋風そ吹 (157)

157番歌は(ソ)に後接する歌で、高松宮A本では、

ゑんなる哥めしける時旅哥

むさしの、露をは袖にはけわひぬ草のしけみに秋風はふく

となつてゐる。すなわち、A本のごとき雑纂形態を整備した人物は、重複する「さとはあれぬ」歌とその歌題を(ソ)部から除棄し、「影供哥合」の会記情報を76番詞書に付け加えたものの、(ソ)部の会記は除棄せず、そのまま157番歌と連続させたものと考えられる。157番歌は建仁二年三月に行われた「三体和歌」の催しで「ことに艶によむべし」と指定された「旅」の作であるが、この操作の結果、高松宮B本や書陵部本においては、あたかも影供歌合で詠まれた歌であるかのように見えることになった。集を整備しようとする意志が、原態の持つ情報をできる限り忠実に留めようとした結果、当初の目的から外れて、実際とは異なる詠作事情を付された歌を生み出してしまったのである。

六 未整理雑纂本文の重要性

〈整備〉作業がもたらした弊害はこれに留まらない。例えば、付表rの例では、

(ソ) 有端 きつきのみなとをななめやりて

いづつかはふかきみなとをたつぬれははるかにつたふわか

の浦波

(A本 237の次)

の歌は、A本のごとく234～239番の出雲大社参詣歌群中に置かれることで、詠まれた状況がよく理解できる。B本・書陵部本では当該歌を右の位置から削除し、

(テ) 出雲の(B本)きつきの宮にまいりていつもの川のほとりにて

出雲川ふるきみなどを尋ねればはるかにつたふわか(B本)のうら松(B本)をのみ残す。詞書によって状況はわかるものの、出雲行で詠まれた歌の一連性は、(ツ)(テ)の両方で失われる。

このように重出歌を削除することで歌群の一連性が失われる例として、v/aについて検討してみたい。少し長くなるがA本の当該箇所を掲げ、便宜のために各歌に記号を付す。

(ト) 薄暮卯花

(245の次④)

(ア)うの花のかきねはかりは暮やらて草の戸さ、ぬたま川の里

暁更廬橘

(245の次⑤)

(イ)よをのこすねさめの袖も朽ぬへしはなたち花のむかしかたりに

古池菖蒲

(246)

(ウ)荒はてし池のみきはもあやめ草引につけてそうちはらひける

(247)

(エ)あやめ草けふひくあとにみゆる哉たてをく石もいけのこ、ろも

(248)

(オ)あやめ草けふひくあとそ池水にたてをく石もありと見えける

遠山郭公

(カ)たつぬへき行衛もしらすほと、きす外山の奥のくもにいる声

(249)

(キ)ほのかにも声そかはらぬほと、きすはなは雲か見えしおのへに

風前夏草

(249の次①)

(ク)秋の色も野へのみとりにこもるらんむすひなはてそしの、をす、き

雨後夏月

(249の次②)

(ケ)とこ夏のはなにたまれる村雨のなこりそ月は見るへかりける

處々照射

(250)

(コ)いかにしてしかのたちとを忍らんともしのかけは山しけやま

家々納涼

(251)

(カ)すゑむすふとなりの人や待つらんせくてにく、る山の井の水

蝉声夏深

(252の次①)

(シ)秋かせもかよふはかりの梢よりまつをはらふや蝉のもる声

螢火秋近

(252の次②)

(ス)今はた、一よはかりや夏むしのもえ行末は秋風のそら

B本・高松宮本では⑦⑧⑨⑩⑪⑫の六首が削除され、A本・B本の18～23(書陵部本128～133)には当該の六首がこの順序で入る。

A本の(ト)には会記が記されないが、A本・B本18番・書陵部本128番には「内大臣殿 座主御、十首哥あはせあるへしとて」（A本による）の詞書が付されて、藤原良経と慈円が催した十首歌合の詠であると推測しうる。拾玉集³²⁶～³³⁵には「緇素歌合十題」として右に掲げた歌題と慈円詠が列挙されている¹³。

(ト)では「古池菖蒲」題の三首の内、㊦㊧が極めて相似た内容であり、この歌群が「十首歌合」のために詠じた歌の草稿だったことを推測させる。「遠山郭公」題歌も二首案じて片方は提出しなかったのだろう。また、別出する六首はその中の自信作であったとも考えられる。A本のように重複歌を含む二歌群が家集内に残されていれば、双方を照らし合わせることで、以上のように類推することは容易である。ところが、B本・書陵部本では重出歌を除棄し、六題六首から成る「内大臣殿 座主 十首歌合」歌群と、会記のない246～252（書本363～370）のグループに分けてしまっているために、これらの歌を同じ折に詠じた一連の歌群として復元することは不可能である。B本・書陵部本の246～252は、これが同じ催しで詠まれた一連の作であることすら認識するのが困難であり、20と249（書本130・366）とに別々に入る二首の「遠山郭公」題歌の関係も理解できない。

以上、見てきたごとく、書陵部本と高松宮B本は重出歌を除棄して整備を図る作業により、特に詠出機会の点で我々に誤解を与えかねない情報を包含することになった。高松宮A本は確かに重出歌が多く、寂蓮ではない何人かが歌稿を忽卒にまとめたような雑然とした印象が拭いがたいが、未整理な形態を残しているがゆえに重要な情報を保持しえていることも確かである。我々がもつ

とも簡便に『寂蓮集』を見ることのできる『私家集大成』と『新編国歌大観』が、ともに〈整備〉を経たゆえの問題を抱えた伝本を底本としているのであれば、『寂蓮集』の内容を検討する際には、もつとも原初的な形態を残しているA本を参看することが、今後は必須の作業になるであろう。

注

- *1 久曾神昇「顕昭・寂蓮」(三省堂、一九四二年)
- *2 半田公平「寂蓮法師全歌集とその研究」(笠間書院、一九七五年)
- *3 酒井茂幸「靈元院仙洞における歌書の書写活動について」(『国立歴史民俗博物館研究報告』12、二〇〇五年三月)。
- *4 高松宮B本の書誌は以下の通り。袋綴一冊。江戸中期写。縦二七・二×横二〇・四cm。紙表紙で鶉色地に明るい灰色の麻の葉文様を刷る。表紙左肩に薄黄土色の題簽(一六、五×三・一cm)を貼り、「寂蓮集」と墨書する。料紙楮紙。遊紙前後各一丁。墨付五十三丁。一面十行書き、和歌一首一行書き、字高約三二・五cm。詞書三～四字下げ。
- *5 『日本古典籍書誌学辞典』(岩波書店)「御所本」の項(小池一行執筆)。
- *6 ただし、「野草秋」題は月詣集⁵²⁸に入る師光歌にも見られる。なお、A本・書本に見える「民部卿」は、藤原経房である可能性が考えられる。経房が「野草秋近」題で歌会を行ったことは他には徴証が残らず、その点でも当該の詞書は注意される。
- *7 猪隈閑白記・建仁元年四月二十六日条に「此日於鳥羽北殿、初有管絃・和歌事云々」と見える行事の詠か。明月記・同日条にこの行事に参加した人々が列挙されるものの、寂蓮の名が見えないのは、貴族に限定した交名であるゆえか。
- *8 iでは詞書「秋雨」、和歌「こはき咲片山かけに日くらしの鳴すさひた

る村雨のそら」で、この歌群の末尾192番左注に「已上左大臣家百首歌合」とある。

*9 ただし、fに続く161、163番歌は六百番歌合の詠（六百番歌合の歌番号716・1026・492）であるにもかかわらず、A本内に残されており、さらに考察が必要である。

*10 (ク)に掲げたdの「うしのこに」歌は、高松宮B本で除棄された理由は不明だが、同本では当該歌の位置に当たる153番歌と154番歌の間が一行分空白になっており、削除した痕跡が明白に残る。

*11 A本では4番歌が164番の次に重出し、B本はこの重載分を除棄している。f歌には詞書がなく、従ってB本の4番歌にも詞書の追記はない。なお、書陵部本はfの位置に当該歌を有しており(279番)、このことから書陵部本がB本よりも早い段階の本文を示していることが推測できる。

*12 この歌合は「影供歌合 建仁二年五月廿六日」として本文が残る。歌合開催の日はこの歌合本文に従った。また、この本文により、歌題は「暁聞郭公」「松風暮涼」「遇不逢恋」の三題であったことが知られる。高松宮A本は75番の歌題を一字落としている。なお、松平本では当該箇所は「松風暮涼」となっている。

*13 『類題鈔』には、「十首〈同家（後京極摂政家）〉として「薄暮卯花」以下の十題が掲げられている（『類題鈔』研究会編『類題鈔（明題抄）影印と翻刻』351頁310、笠間書院、一九九四年）。

〈付記〉 貴重な典籍の閲覧と翻刻を御許可くださった、国立歴史民俗博物館、宮内庁書陵部、肥前嶋原松平文庫と関係の各位に篤く御礼申し上げます。

An Essay on Jakuren-syu Kept in Prince Takamatsu Collection
— Development and Characteristics of Miscellaneous Jakuren-syu —

NAKAMURA, Aya

キーワード：寂蓮集、高松宮旧蔵本、変容
Key words : Jakuren-syu, Prince Takamatsu Collection, Modification